

けんこう処方箋

北海道柔道整復師会会長 萩原 正和



ほっかいどう

水曜生きる

木曜よも語る

金曜楽しむ

土曜考える

火曜学ぶ

釧路で整骨院 慕われた祖父

国家資格である柔道整復師は現在、各地で整骨院を開業し、地域医療の一部を担っている。今回は、そんな「まちの整骨院」の原点につながる話を、時代をさかのぼってしようと思う。

舞台は、大正から昭和にかかる、89歳になる私の母がまだ幼かったころの釧路だ。

開拓も盛りで機械も少なく、人力がものをいう戦前の時代。物資も生活も乏しくはあったが、人々は厳しい環境の中でも、互いに助け合って生活していた。

当然、北の辺境の地に病院は整備されておらず、そこには整骨院が1軒あるだけ。釧路・根室地域はもとより、千島列島からも多く



イラスト・佐藤博美

入院施設もあったが、時には部屋が足らず、廊下にまで布団を敷き詰めていた。

実はこの整骨院、冒頭に書いた私の母の実家である。学校から帰ると、自分の部屋が入院部屋として使われていたことがよくあったぞうだ。

院長である私の祖父、辻徳夫(北海道柔道整復師会3代目会長)は、薬剤師と柔道整復師の両方の資格を持ち、非常に人情味あふれた人物であった。

例えば、千島列島から来た子どもの入院患者さんには「退屈だろう」と漫画を買い与え、親代わりに整骨院から通学をさせ、尋常小学校卒業まで面倒をみた。また、治療費も、漁師には

漁で収入が入るまで待ち、収入が少ないアイヌの人がいれば後払いにした。

いつしか、アイヌの人たちからは親しみと敬意を込めた人に対してしか使わない「ニシパ」との愛称で呼ばれるようになった。

昔の整骨院にはよく柔道場が併設されていた。ここも例外ではなく、祖父は整骨院長であるとともに講道館柔道7段の道場主だった。東京の薬科大在学中、柔道に熱が入り講道館へ通いつめ、嘉納治五郎師範から「北海道のクマ」と称される腕前になったぞうだ。

この釧路の柔道場では、学校帰りの少年たちが額に汗を浮かべながら、憧れの先輩目指して毎日稽古に励んだ。元気な子どもたちの声や柔道技の音が道場に響き渡る。祖父はそんな光景を厳しくも温かいまなざしで見守っていたのだろう。

の患者さんが来ていたため、整骨院ながら「千島病院」と呼ばれていた。

患者さんの輸送手段は人や馬、人力車、台車、船。担架がなく、戸板に乗せら

れて運ばれて来た人もいた。子どもから働き盛りの大男まで、骨折、脱臼、捻挫、挫傷――様々な外傷で患者は訪れ、さながら救急病院のような状態だった。